

[学術論文]

「女子力」とポストフェミニズム

——大学生の「女子力」使用実態アンケート調査から——

“Joshi-ryoku” and Postfeminism: from the actual condition survey about how
undergraduates use the word “Joshi-ryoku”

菊 地 夏 野

Natsuno KIKUCHI

Studies in Humanities and Cultures

No. 25

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 25号
2016年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2016

[学術論文]

「女子力」とポストフェミニズム

——大学生の「女子力」使用実態アンケート調査から——

“Joshi-ryoku” and Postfeminism: from the actual condition survey about how undergraduates use the word “Joshi-ryoku”

菊 地 夏 野
Natsuno KIKUCHI

1 はじめに

現代日本社会は様々な意味で「混迷」しているといわれるが、ジェンダーについてはとくにそう感じられる。インターネットを中心とするメディア上では若い女性の「専業主婦願望」が語られている。社会状況の急速な変化により、人びとのジェンダー意識も変容していることが推測されるが、その具体的な中身は十分に検証されないまま、個々の現象的側面が注目されるに止まっているようだ。

ジェンダー論でも、近年の日本社会のジェンダー意識について探ったものは多くない。本論では、近年の日本社会のジェンダー意識やジェンダー秩序¹は、これまでのジェンダー論の枠組みからずれる新しい要素を含んでいるのではないかと考えている。つまり、第2波フェミニズムが対峙した社会状況、ジェンダー秩序とは異なる現状が広がっているのではないかということである。

それについて検討するために、本論では筆者が関わって行った「女子力」に関するアンケート調査を用いる。女子力は近年流行した言葉である²。マスメディア上でも頻出するし、また若い世代で日常的に多く用いられている。アンケート調査を分析するために、ポストフェミニズム論の視点を参考にする。ポストフェミニズム論とは英米で近年広がっているとされる言説であるが、これが日本社会においても見られるといえるかどうかを探るのが本論の主な目的でもある。

¹ 本論で「ジェンダー秩序」とは、ジェンダーに関してその社会で主流あるいは支配的なものとして一定の広がりを持っている秩序という意味で用いる。

² 「女子力」は2009年に『ユークキャン新語・流行語大賞』にノミネートされている。

2 ポストフェミニズム論について

まず本節ではポストフェミニズム論について延べる。「Postfeminism (ポストフェミニズム)」という語自体は1980年代のアメリカで既に使われている³。例えばSusan Faludi (1991) は下記のように書いている。

フェミニズムなんて「あまりに70年っばい」と、ちょっとした知識人は退屈そうに言う。「今や“ポスト・フェミニスト”の時代」なのだそうだ。つまり、平等が達成されたとか、それを乗り越えたというのでは決してないが、関心を装うつもりもはや女性にはなくなってしまった時代なのだそうだ。(Faludi 1991=1994: 76)

この時期には、「ポストフェミニズム」はフェミニズムの立場に立つのではない側が積極的に用いた言葉で、フェミニズムに対して否定的な意味合いで「フェミニズムは終わったもの」と当時の時代を見なすために使われていた。

そして2000年代以降になると、逆に「ポストフェミニズム」という状況を批判的に分析するために考察が進められている。代表的な論者としてはAngela McRobbie (2009)、Shelley Budgeon (2011)、Rosalind Gill (2007) などが挙げられるだろう。論者によって内容は異なるが、大枠の概要としては、「フェミニズムは終わった」という言説が支配的になっていることや反フェミニストの感情が一般に、とくに若い女性に広がっていることを危惧している。そして、「個人の選択」や「エンパワメント」等のフェミニズム的な語彙が広がった代わりに、女性たちは新しい女性性を身につけるよう社会的に要請されていると考察する。それは、身体的資産として女性性を感受し、性的客体から性的主体へと変化することや、個人主義を前提として選択とエンパワメントに価値をおく世界観、そしてそのために自己監視と規律を身につけていくことなどを内容としている。そのような新しい女性性をとりまくように、性的差異を再主張する言説が流行していると分析している。このように、フェミニズムと反フェミニズムが共存しているのがポストフェミニズムを分析するさいの難しさである。

これらのポストフェミニズム論はまだ日本では多くは紹介されていない⁴。簡単に言及しているものを二・三紹介すると、田中東子は、『ポストフェミニズム』というの、一般的なジェンダー間の平等はもはや達成され、フェミニズムは必要なくなってしまったという状況や、フェミニズムは使い尽くされてしまったという状況を示すための言葉(田中 2012: 6)としている。

³ Rosenfelt & Stacey (1987) は、Postfeminismのマスメディアにおける初出をNew York Times Magazine, 17 Oct. 1982として、「性差別にあいまいな名前を与えたに過ぎない」と批判的に見ている。

⁴ 竹村和子 (2003) はポストフェミニズムを冠しているが、そこでの同語の定義は、1980年代の用いられかたを受けて考えられているように解される。

三浦玲一は『ポスト』フェミニズムとは、『フェミニズムは終わった』という認識であり、また、フェミニズムが終わったとして『その後の女の問題』という意味でもある」（三浦 2013: 62）とし、河野真太郎は「ポストフェミニズム状況は、第2波フェミニズムの忘却、母の世代の忘却の上に成り立っている」（河野 2015: 176）としている。

一見して、ポストフェミニズムを「フェミニズムは終わった」ことを示す事実そのものと見なす定義と、そうではなく「フェミニズムは終わった」と社会的に多くの人に認識されているという言説状況を示すものと見なす定義が混在していることが分かるだろう。このように、ポストフェミニズム論は、「フェミニズム」という言葉の定義、「終わった」ということの水準、判断する主体の位置など多くの点で難しい。日本では議論が開始された段階だと考えられる。

本論では、ポストフェミニズムは社会の支配的な言説にくみこまれたものであり、じっさいに「フェミニズムは終わった」かどうかとは違う次元で展開されていると考える。「フェミニズムは終わった」という命題自体、検証が非常に困難なものである。そして、日本のジェンダー論・フェミニズムではまだ議論は少ないが、ポストフェミニズム論は現在日本の新自由主義的社会とジェンダーを分析する上で有意義なのではないかと考えている。

渡辺治（David Harvey 2005=2007）によれば、欧米では1980年代から徐々に福祉国家からネオリベラリズムへ移行したが、日本ではやっと2000年代から本格化した。このネオリベラリズムがジェンダー面でどのような意味をもっているか渡辺は論じていないが、近年の女性労働の変容にその展開を跡づけることができるだろう。労働市場に女性がどんどん導入され、一部で競争できる女性がエリート層へ登用されていく。一方で民営化された医療・介護・福祉分野へは安価な労働力として女性が割当てられ、女性間格差が拡大した。にもかかわらず社会意識としては男女平等よりも効率、競争を優先させる価値観が強まるため、女性運動は成立し難くなる。他面で伝統的・保守的な価値観の復活が試みられ、ときによりバックラッシュとしてフェミニズム側は反撃したが、保守主義はひとつの社会潮流として定着している。

このようなネオリベラリズム的な社会状況がポストフェミニズム現象の背景にある。以上の視点から、本論ではポストフェミニズムを「フェミニズムを終わったものとして認識させ、フェミニズム的な価値観を周縁化し、それによってジェンダーとセクシュアリティの秩序を再編する社会状況」と定義したい⁵。この再編されたジェンダー・セクシュアリティ秩序が現在どのように分節化されているかを鮮明に表現しているのが「女子力」という語彙ではないかというのが本論の視点である。

「女子力」現象について拙稿（菊地 2015）でも概略を論じたが、本論では本田由紀（2005）の「ポスト近代型能力」論を参考にする。

⁵ 筆者は、ポストフェミニズムはネオリベラリズム下での世界的な現象であり、ネオリベラリズムの主要で必須な構成要素ではないかと考えているが、これについては次稿の課題としたい。

本田は現在を、近代社会からポスト近代社会へ移行した段階と見る。本田によれば近代社会はメリトクラシー（業績主義を人々の社会的位置づけに関する支配的なルールとする社会）を編成原理とするが、ポスト近代社会では選抜の公正さが後退して、業績主義が人間存在のより全体的なレベルまで深化したハイパー・メリトクラシーが基軸とされるように変わると論じる。そこで望まれる「ポスト近代型能力」の特徴は、個々人に応じて多様でありかつ意欲などの情動的な部分を多く含む能力であり、相互に異なる個人の間で柔軟にネットワークを形成し、リソースとして他者を活用できるスキルをもつことである。これは個々人の人格や感情、身体などと一体化したものであり、個々人の生来の資質か、成長過程における日常的・持続的な環境要件によって決まる部分が大きい。そのため家庭環境という要素が重要化する。

この本田の「ポスト近代型能力」は、本田は言及していないものの、女性に求められる特性と重なる部分が大きく、ポスト近代社会における「能力の女性化」を象徴するとも考えられる。本論では、そのようなポスト近代型能力の代表的なものが「女子力」ではないかと考えている。

3 「女子」に関する研究

本節では、「女子力」に関する先行研究をみてみたい。近年の流行語としての「女子」について研究は少ないが、馬場伸彦・池田太臣は「フェミニズム的観点をするとかわす」（馬場・池田編 2012: 24）ものとして「女子」を捉えている。

同様の立場に立つものが米澤泉『「女子」の誕生』（2014）である。米澤は、「女子力」を女性を解放するものと捉えている。

ファッション誌の「女子力」とは装いの持つ力なのだ。装いの力としての「女子力」は、基本的に男性に向けられているものではない。むしろ、「女子」として生きていくための原動力となっているものである。装いの力によって、女は「女子」となる。妻や母といった社会的役割、良妻賢母規範を軽やかに脱ぎ捨てるファッション誌の「女子力」はもっと評価されるべきであろう。（米澤 2014: 191）

さらに、次のくだりのように米澤は女子や女子力といった言葉を、年齢や価値観などを超える意味合いをもつものと考えている。

ファッション誌の「女子」たちが、装いによって「常識」を超え、年齢を超え、時には価値観や、規範を揺るがせていることが明白になるだろう。ファッションや化粧が些末な日常

の営みを超え、繭と鎧になり、「女子」を守る力となっていることも。（米澤 2014: はしがき iii）

米澤の議論は、ファッション誌における「女子」や「女子力」という語彙を、現実社会の女性たちのおかれた立場と区別せずに用いているため、社会学的検討の対象としづらいが、このような「女子」「女子力」に対するまなざしは、一定の社会的傾向に沿っているものと考えられる。

さらに、米澤のフェミニズム観が伺える部分を引用する。

研究者の世界は腐女子と文科系女子の巣窟である。…略…女子をこじらせないと研究者にはなれないのだろうか。男性の欲望の対象として自らの身体を飾り立てるなどもってのほか。ファッションや化粧を否定することから知の探求は始まるのだろうか。それこそ、行き過ぎたフェミニズムの弊害ではなからうか（米澤 2014: 25）

このようなくだりからは、米澤のフェミニズム観がポストフェミニズムの言説とほぼ重なっていることが分かる。すなわち、米澤の「女子力」観は、ポストフェミニズム社会のそれと類似していると仮定できる。

本論では、このような先行研究における「女子力」観がじっさいに「女子力」の使われる様相と一致しているかどうか検討する。これらの先行研究では「女子力」を「男性に向けられるのではなく、年齢や価値観を超えて女性を良妻賢母規範から脱却させる力を持つもの」としている。このような「女子力」観は妥当なのか考察したい。

4 アンケート調査の概要

本アンケート調査は、女子力にパワーを見出す肯定的な議論に対して、「女子力」がじっさいに若い男女のあいだでどのような意味合いで使用されているか一端を探るために行った。筆者の勤務する大学の「調査実習」科目において実施したものであり、その報告書から内容の一部を紹介する⁶。アンケート調査の対象は愛知県内の大学に通う大学生、合計782名である。7大学13科目の授業で担当教員の協力を得て出席者対象に実施した。調査期間は2013年9月から12月である。対象者の選出方法など厳密な手続きに従った実証的調査ではないが、本論では議論の素材として紹介したい。

⁶ 報告書中の字句や句読点の誤りなどについて修正して掲載する。

4.1 対象者の性別と年代

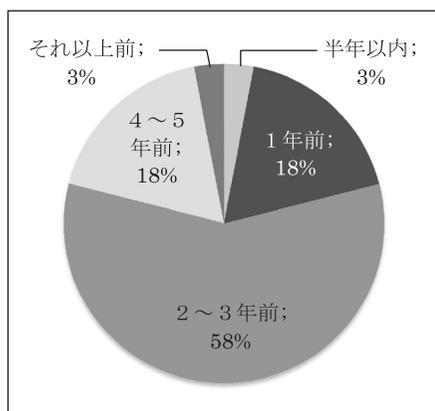
対象者の性別は女性が457名で58%、男性が285名で37%、無回答が40名で5%だった。年代は、19歳以下が262名で34%、20歳代前半が441名で56%、その他が36名で5%、無回答が40名で5%だった。

4.2 「女子力」という言葉の認知について

「女子力という言葉を知っていますか」という質問に対しては、98%が知っていると回答した。

「女子力という言葉を知った時期」については、表1のように、「2～3年前」と回答した者が58%を占め、2010年前後に認知した者が多かった。

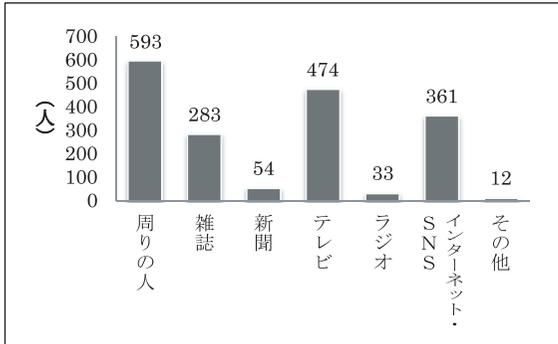
表1



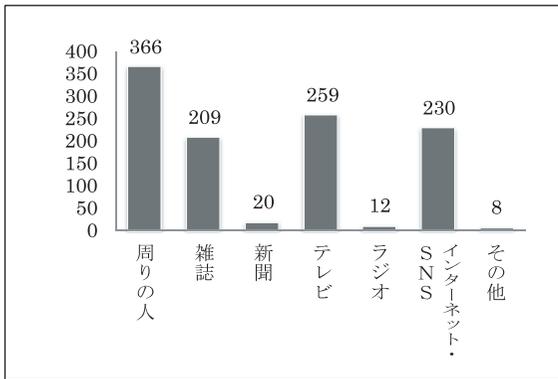
「どのようにして『女子力』という言葉を知ったか（あてはまるものすべてに○）」については、表2のように、「周りの人」「テレビ」「インターネット・SNS」という回答が多かった。女性において「雑誌」と回答したものが多かった。

表 2

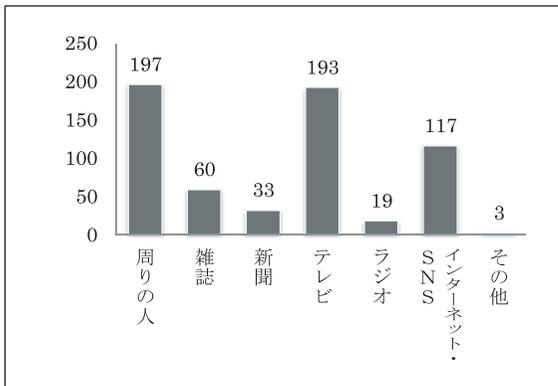
全体



女性



男性



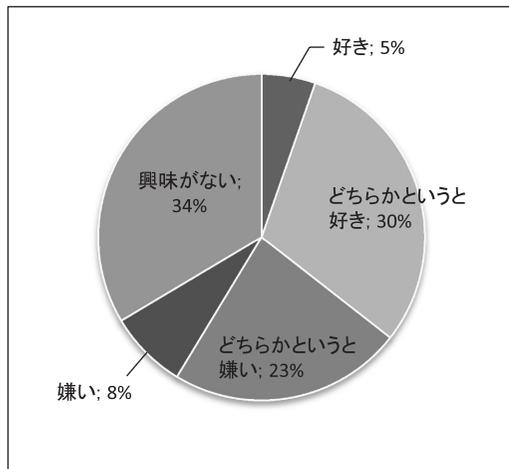
4.3 「女子力」という言葉の内容について

『女子力』という言葉が好きか嫌いかを聞いたところ、表3のように女性は「好き」「どちらか」として好きがあわせて35%、「どちらか」として嫌い「嫌い」があわせて31%、男性は「好き」「どちらか」として好きがあわせて33%、「どちらか」として嫌い「嫌い」があわせて

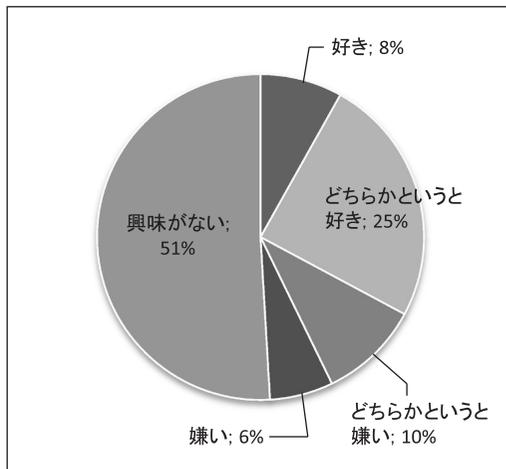
て16%だった。とくに男性は51%が「興味がない」と答えている。それに対して女性は、当事者として意識もしている分、好き嫌いも大きく分かれた。

表 3

女性



男性



『女子力』という言葉において内面と外見どちらを重視するかを聞いたところ、表4のように、男女ともに「内面」を選んだ者が多かったが、女性の方で「外面」を選んだ割合が高かった。

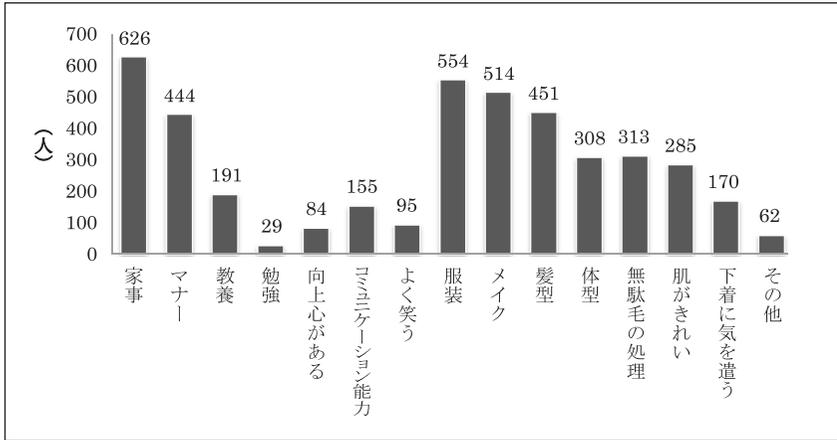
表 4

	外見	内面
全体	21%	79%
女性	27%	73%
男性	13%	87%

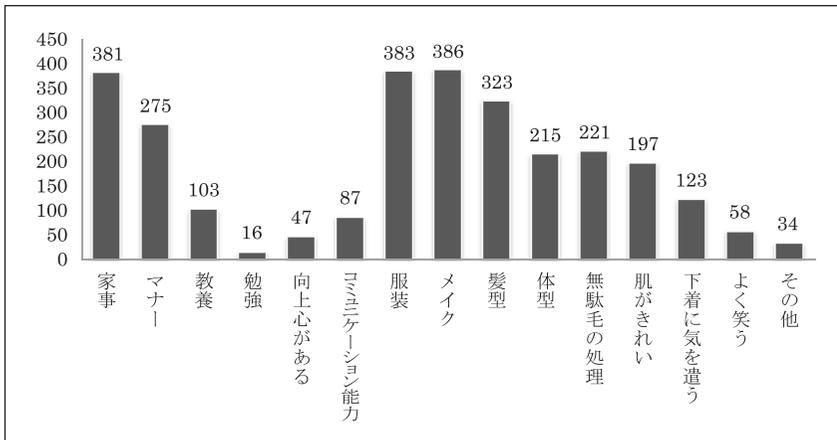
『女子力』が高いと聞いてイメージすることは？（当てはまるものすべてに○）」と聞いたところ、表5のように、男女あわせると「家事」「服装」「メイク」「髪型」「マナー」などが多かった。男女別に見ると、最も多いのは女性で「メイク」「服装」であるのに対して男性では「家事」となった。これは、前掲の「女子力」を内面外面どちらで重視するかという設問の結果と関わって、女性が「女子力」の意味としてより外面を重視している傾向を表している。

表 5

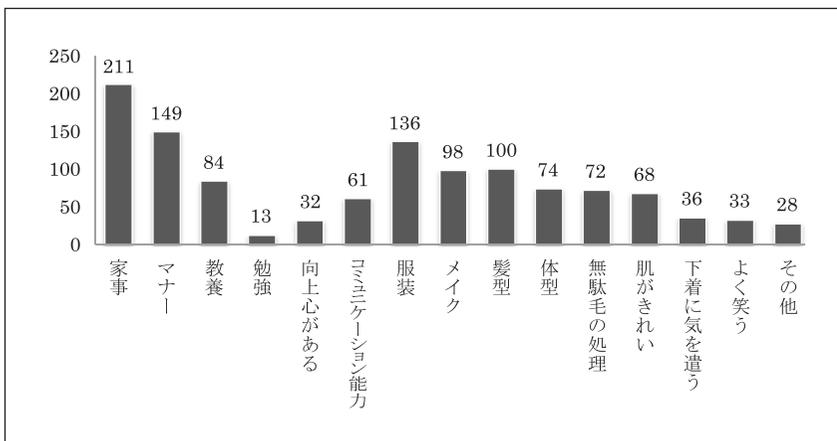
全体



女性



男性



「女子力が高いと聞いてイメージすること」の「その他」として自由回答を求めたところ、下記のような回答（抜粋）となった⁷。

〈女性〉

家事6：お菓子作り(2)、料理ができる、掃除ができる、裁縫、アクセサリー作り

持ち物9：絆創膏を持っている(3)、ティッシュを持ち歩く(4)、ハンカチをもっている(2)

性格・感性7：センスが良い、性格を磨く、明るい性格、花が好き、優しさ、子供の面倒見が良い、小さくて弱いものを守る母性

行動20：気配り(15)、言葉使い(3)、字がきれい、料理のとりわけ

その他1：スイーツ

〈男性〉

持ち物1：常にティッシュなどを持ち歩く

行動21：しぐさが女子っぽい、金遣いがしっかりしている、女性ならばその分析での力の発揮社会的（公的）な存在感大、過度な化粧をしない、下手に他人の（他の女性の）真似をしない、ちょっとしたことができる、気配り(13)、準備がいい、料理を取り分けてくれる

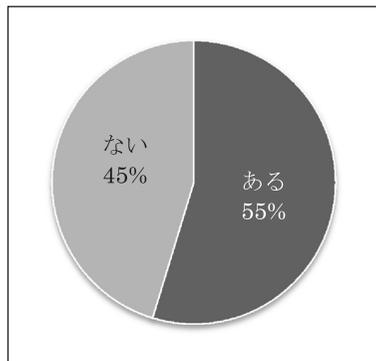
その他3：男性と対等であり女性特有の考えが持てる、すべての項目を揶揄して使っている、興味がない

4.4 「女子力」という言葉の使用について

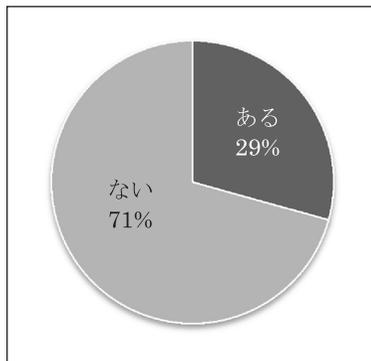
「あなたは『女子力が高い／低い』といわれたことがあるか」を聞いたところ、表6のような結果となった。女性の55%が「ある」と答えているが、男性でも29%が「ある」と答えている。

表6

女性



男性



⁷ 自由記述内の数字は、類似の回答をまとめた合計数である。

さらに、「ある」と答えた者に、そのように「高い」あるいは「低い」と言われた理由を聞いたところ、下記のような自由回答が寄せられた（抜粋）。

〈女性〉

〈高い〉

外見32：服装に気を使っている(10)、髪型に気を使っている(3)、美意識に気を使っている、ネイル(5)、脱毛、エステに行く、身の回りに気を使う(2)、メイクに気を遣っている(9)

内面110：お菓子を作った(26)、料理をした(22)、家事をした(2)、掃除をした、お弁当を作った(3)、ティッシュを持っていた(12)、絆創膏を持っていた(5)、ウェットティッシュを持っていた(2)、よく笑う、料理のとりわけ(20)、動作が女の子らしい(3)、気配り(6)、手芸ができる(5)、家事ができる、日本ソムリエ協会から発売されているワイン女子本に登場させてもらい活動している

〈低い〉

外見20：外見に気を使っていない(4)、メイクをせずに外出した(14)、ファッションに興味がない、女の子っぽい格好をしていなかった

内面63：家事ができない(7)、部屋が汚い、ロッカーがぐちゃぐちゃ、料理ができない(6)、家でダラダラ(2)、休みの過ごし方が残念だった、しぐさが女子っぽくない、行動がおおざっぱ(2)、めんどくさがり、雑(3)、がさつ(2)、だらしない、言葉使いが悪い(4)、女子大生のイメージとそぐわないことをしていた、粗野なふるまいをした、率先して料理を取り分ける子に対して何もしなかったから、足を広げて座っていた、行動が老けている(3)、態度がだらしない、マナーがなってない、普段から低さが目に見えているんだと思う、女の子っぽくないと言われた、野蛮、ひもの、服装(8)、持ち物(2)、食べ方、しゃべり方、しぐさ、生活態度、何でもはっきり言う、男勝り、マナー？、イメージ？

〈男性〉

外見2：肌がきれい(2)

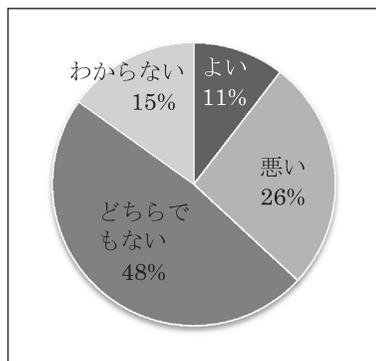
内面47：料理(14)、家事(6)、お菓子作り(3)、部屋の掃除、ばんそうこう(3)、救急セットをもっていた、手鏡、櫛を持ち歩いていた、いろいろ入っているポーチを持っている、料理のとりわけ(3)、気配りができていた(5)、小物作り、オネエっぽくしていた、子供の扱いがうまかった、ラスト一個に弱い、マナーが身についているから、SNSの本文、冗談で、身の周りがしっかりしている

『「女子力」という言葉で、人を評価することについてどう思いますか』と聞いたところ、表7のような結果となった。男女ともに「どちらでもない」が最も多く、「女子力」という言葉を

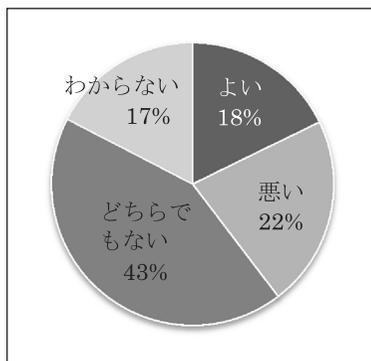
とりたてて意識せず使っていることが窺える。

表7

女性



男性



また、関連して、「よい」「悪い」と思う理由を聞いたところ、下記のような自由回答があった(抜粋)。

(女性)

〈よい〉

努力することに意義がある(4)、女子力が高い人は努力をしている、向上心を持っている、頑張っている証拠、努力した人を評価しているから、女性らしさの向上になる(10)、目指すものができる(2)、女子力がすべてではないが女性らしさを表現するのに便利、女性として女子力が高いほうがすてき、女性らしさは大切、意識が高まる、皆きれいになる、女子としてのやるべきことが身に着くことはいいこと、褒め言葉(5)、悪くは思わない、言われたらうれしい(2)、自分で稼いだお金で自分を磨いておりお金をかけてない人のひがみ、そんなに重大な意味を込めて使っていない、ただのコミュニケーションツール、客観的評価の一つ(2)

〈悪い〉

女子だけに必要な能力ではない、ジェンダーバイアス、少し差別しているように聞こえる、男女差別に感じる(2)、ジェンダー的な問題がある、女子力=作り上げたもの、男性の心理をコントロールするというイメージ、「女子力」が高い=男にこびているイメージ、家事能力について女子力という言葉で表すとまるで男性は家事を一切しなくても良いかのように感じる、女子力に当てはまらない女子はあたかも女子ではないような気分を抱かせるおそれがある、男性に都合のよい女性を作るための手段として利用されている側面があると感じる、価値観の押しつけに感じる(11)、褒められてる気がしない、なんでそんなことにみんな振り回されてるのかわからない、馬

鹿にされている、女子なのに低いといわれるとけなされている感じがする、人の良しあしは女子力だけではない(21)、その人の個性を重視すべき(3)、人間力のほうが大切、外見だけの評価のよう、ボーイッシュな女性もいていいと思う、個性を女子「力」として能力化してさらに対象を「女子」に限定している

〈どちらでもない〉

便利な言葉、言葉自体に重大な意味はない、安直だとは思いますがそれなりに浅い気持ちでの評価でしかない、コミュニケーションをはかるための言葉(5)、本気で「女子力」という言葉で人を評価している人はあまりいないと思う、本気で真剣に言っているのかわからないことが多数、女子力とは評価する言葉ではない(4)、一つの基準、そこまで深い意味はない(3)、冗談で言っていることが多い、友人同士のコミュニケーションの一環なら問題はない、流行、「女子力」はたいした能力じゃないと自分は感じている、そこまで重要な意味もなく冗談だと思うのでこのアンケートもあまり本気にしない方がいい気がする、それだけで人間を判断してしまうのはよくない(9)、女子力がないからといってその人がだめという理由にならない、中身と外見あわせて「女子力」だが見た目だけで判断する人もいる、その人の個性もある、女性だけに求められるものではない、それだけで片付けるのは少し…と感じる、基本的にほめている(2)、自分自身嫌な気はしない、褒め言葉で使われる分にはいい(3)、端的にわかりやすい、定義があいまい(10)、差別にもつながる、あまりにも抽象的、「女子力」の基準は人それぞれ、「女子力」という言葉も賛否両論、言った人の気持ちによる(悪意があるかないか)、重視する人たちは「女子力」を使えばいい、自由、個性だから、人それぞれ(11)、高いと言われて喜ぶ人高いと言われてたくて頑張る人それぞれいるから、と言われてうれしいならそれでいいし嫌だと思ふ人は言わなければいい、個人の自由、関心がない(11)、女子力という言葉に良い印象も悪い印象も持っていない、傷つかない、気にならない、こだわらない、なんとなく、女子力が低い人からすればどうでもいいこと、すごくいいわけでもないし悪くもない、言葉を使うこと自体悪いことではないが個人的に好きではない、時と場合による(7)、少し前までは嫌だったが今は慣れた、だらしがないなどよりも女子力が低いと言った方がニュアンスに刺がなく便利、内面的な判断についてのみいい、いい評価としてつかうならいい、男子力もあっていい、女子力=女性らしくあらねばというプレッシャーを感じる、女性や男性なのに女子力が高いと言われて快く思わない人もいるだろうから反対、結局言っている本人が気にしているのでは、女子としてはほめられればうれしいが家事が得意な男子が言われるといやかも知れない、高いとうれしいが低いと嫌な思いをする、男っぽくなりたい人もいると思う、言われたらうれしい言葉ではあるがのんびりしたいときに「女子力ない」といわれると腹が立つ、そういう評価方法があってもおかしくはない、あまりその言葉にとらわれたくない、良くも悪くもない(2)、あまり過激になることでもない

〈男性〉

〈よい〉

プラスの雰囲気が使われるのはいい、悪い言葉ではない、プラスなイメージだから、高くて悪いことはないと思う、他者から女子力が高いといわれることは言われた側としてはうれしいから、それによって女性が努力する、より気を配ろうという向上心が養える、女子力という言葉があるから頑張れる、少しでも女子の地位向上につながると思う、ほかの言い方より丸い感じがする、一つの指標としてある程度明確化されていてわかりやすい、評価基準のひとつだから、評価の仕方のひとつだとも思う、女子力とは言っても人の内面性を評価することだと思っているので特に問題はないと思う

〈悪い〉

男女のジェンダー問題、女子力と言って女子を強調するのは良くない、マイナスイメージがついている気がする、「女子力」という言葉にあまりいいイメージがない、気品が感じられない、女子という言葉が気持ち悪い、感じが悪い、女子力で一括りにすること自体ダメ、定義が曖昧、考えが属人(?)的で共有できていない、女子力だけが評価する言葉ではない、人間力の方が大事、女子力以外でも評価すべきところがある(6)、「女子力」が高いからいいというのは一つの価値観にすぎない、画一化される、人は個性によりけりだから、「女子力」の捉え方は人それぞれ、女子力という固定化された概念で人を区別するのはよくない、なんとなく、女子力の高低で差別されるかもしれない、どうしても外面で判断されがちであるため

〈どちらでもない〉

まじめな評価でなくネタとして使っている、そこまで重要なことではない、日常会話の中で軽い気持ちで使われる言葉だから、軽いノリで使われる言葉、女子力にウエイトを置いていないので会話のネタとして使うだけだから、ただの流行、結局はマスコミの作った言葉でしかない、評価というほどこの言葉に重きを置いて使っている人はほとんどいないと思う、とくに悪い意味はない(2)、定義が確立していない(9)、気にしていない、なんとなく、特になんとも思わない、興味がない(6)、外見を指しているなら個人の趣味で内面ならば「人そのものの気質」であって男女共通の話だと思う、女性らしさというより家事のできる出来ないだと思う、いいことをしたときに女子力高いというのはいいがいちいち女子力で高い低いをつけるのは失礼、良いとは思わないけどただ何かをしたときにその言葉を用いるだけで評価まではしてない、たまに人を傷つけてしまう、儒教みたいなものでは、女はおしとやかにみえるが女子力を上げるために日々戦っているから、その言葉で人の見方が変わることはない

〈わからない〉

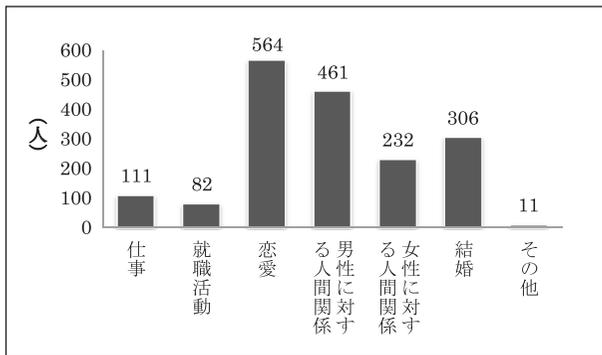
内面を女子力というくりだけで評価できるとは思えないから、本当に人を評価するときには使われないから、それだけではないと思う、定義がよくわからない、ただのメディアの話題作りだ

と思うがよくわからない、女子力が高いということを知り手がどう理解しているのかわからない、女子という年齢じゃない人にもこの言葉をつかうのが不明、男性はあまり影響はないが女性はあると思う、人による印象だから、いわれた事がない、人によって受け止め方が違う(2)、興味がない(2)

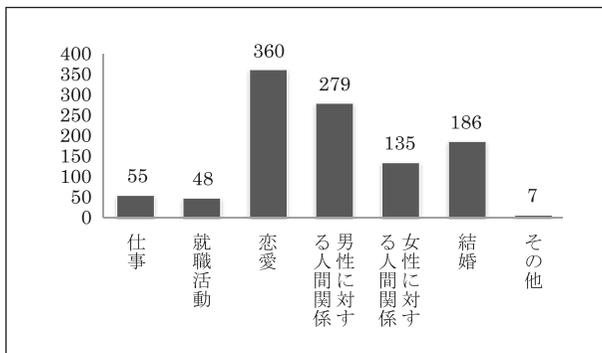
『女子力』が高いと有利になると思うものがあれば最大3つまで選んでください」と聞いたところ、表8のような結果となった。多い順から「恋愛」「男性に対する人間関係」「結婚」となり、男女でこの順番に違いはなかった。

表 8

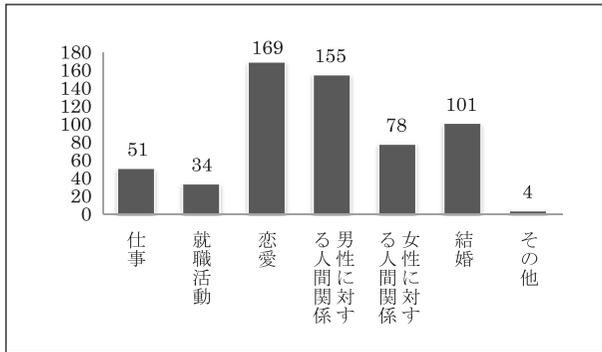
全体



女性



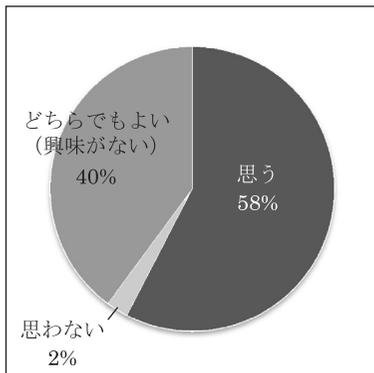
男性



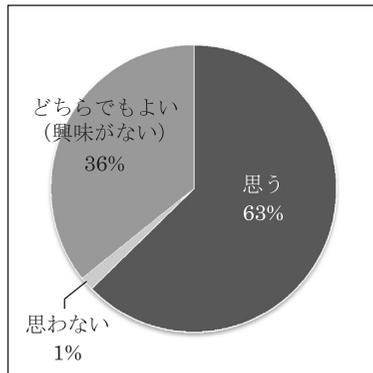
「女性が『女子力』をあげようとするについてよいと思いますか」と聞いたところ、表9のように、「思う」「どちらでもよい（興味がない）」がほとんどで、「思わない」はわずか2%だった。前掲の「女子力」で評価することの是非について聞いた結果より肯定的な回答がより多い。これは、「女子力」を一般的な評価の物差しとして考えるときと違い、女性によって自発的に努力されるものとして考えるとき否定できないものとして受け取られているということだろう。

表9

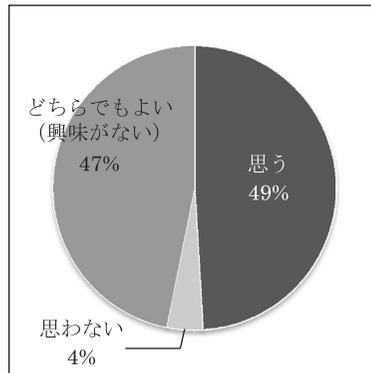
全体



女性



男性



さらにその理由について聞いたところ下記のような自由回答が寄せられた（抜粋）。

〈思う〉

自分のためになる33：「女子力」の指すもの自体はよいものだから、将来的に役立つと思う(3)、特有能力を持つから、「女子力」に限らず自分を高めようとする事だから(3)、悪く働くことはないと思う(5)、家事や服装は自分のためになる、教養やマナーが身に付くなど、その人にとってプラスになる(5)、低いよりも高いほうがいい(6)、イメージがよくなる、色々な場面で有利だから、「女子力」には料理など一人で生活するのに必要な技術が含まれているからあって損はない(2)、自分をよりよく改善できるから、自分の能力の向上だから、物事において前向きになれる

意識の向上58：向上心があるのはいいこと(17)、自分を磨くことはいいこと(16)、努力しない人よりどんな形であれ努力している人のほうが好感が持てる、努力することはいいこと(4)、素敵な女性になるように努力している姿がすてき(2)、いつまでも綺麗でいたい(3)、美を追い求めることはいいこと(8)、自分を魅力的にしようとするのは自然なこと、何事も身だしなみに気を使うのはいいことだから、とくに理由はないがあげようとするのはよいこと、人の内面的向上は良い事だから、頑張ることや一生懸命な人は素敵だから、より素敵になろうとするのはいいこと、努力してあげるならそれは良いことだから

女性らしさの向上27：女性が女性らしさを求めるのは女性として普通、女性として女性らしくいることはいいこと(6)、人間として女としていい方向になる、「女子力」をあげようとする意識は女性にとってよいこと、良い女になるよう普段から意識するのはいいことだから、一層女性らしさが出てくるから、女性らしさを高めることはよいこと、「女性らしさ」のレベルが上がるため、女らしくなりたいと思う人はかわいい、好まれるのでは(3)、社会からの圧力でもある「女性らしさ」を納得して受け入れ自分に落とし込もうとするのはえらい、男性から見ると「女子力」が

高い女性は魅力的であり自分の魅力を上げることは良いことだと思う、「女子力」が高い子は好きだから、かわいくなるかもしれない、女性がみんなきれいになるのはいいことだから、女性としてだけでなく人間性の向上にもつながる(2)、女子としてすばらしい女性としての魅力も増えるし女性として素敵、男らしく雑な女性が多いから、女子が女子らしさを増すことはいいこと
社会への影響9：清潔さを保てる、下品な言葉遣いな子が減る、お菓子や料理を食べられる機会が増える、人並みに家事はできてほしい、家庭的な人が増える、草食系男子が増えている中でこれからの中心になるのは女子だと思う、日本中にマナーのついた人が多くなる、かわいい人が増える(2)

その他24：「女子力」が高いことにマイナスのイメージがない(5)、人それぞれ、個人の自由(8)、毎日が楽しいのでは、人から好かれるような人になる、きっかけになる、知ってもらうということは大事だから、恋人が喜ぶ、見た目に気を使うのは良いことだから、かわいいは作れるから、素晴らしいから、マナー向上につながる、女子力を磨きたいと思う人の思いは尊重すべき
〈思わない〉

定義について23：価値観の押しつけに感じる(5)、客観的でない、個性を認めていない(13)、自分の価値観と異なる、「女子力」にあてはまらない女子は女子でないのか、男性に都合の良い女性をつくる手段、「女子力」という言葉はバカにしてる面もある

「女子力」だけで判断すべきではない28：人を評価するポイントとは少し異なる、人の良しあしは「女子力」だけではない(24)、外見を判断しがち(2)、「女子力」は外見を判断することが多く料理のとりわけ等必ずしも「女子力」だと思わない

その他24：人によって考え方はそれぞれ(2)、定義があいまいで人によって意味が違う(19)、他人の判断は気にしない、勝手、女子は女子
〈どちらでもよい(興味がない)〉

定義が不明8：「女子力」の定義がわからない(4)、決まった基準がないので変に化粧などに力を入れると逆効果、「女子力」のとらえ方は人それぞれだと思うから、具体的目標として意味がないから、人それぞれ生活の中で大切に思っていることは違う

男女の問題4：男性が「女子力」をあげてもよいし女性が男子力をあげてもよいと思うから、向上心を持つか否かは人の選択の自由 むしろ「男性が「女子力」をあげる」ことについての問がないことが気になる、「女子力」はジェンダー問題とかかわってくると思うから、「夫は仕事妻は家事」のような「女はこうあるべき」と言われている気がする

「女子力」をあげることに意味はない20：「女子力」を上げてても下げてても友人からしか利益がない、「女子力」を気にしなくてもそれなりに充実した生活はできる、自分はそれで評価しないから、自分には関係ない人を「女子力」では見ない、「女子力」はただの便利な言葉、「女子力」が高い人がよいと限らない(9)、悪いことでもないが特別いいことでもない、人間力の方が大切、

「女子力」＝気が利くというイメージだが気が利いても利かなくても問題じゃない、そのままの自分で満足、「女子力」をあげたところでなにもならない、特に重要視していない

無理にあげるものではない13：「女子力」よりもじぶんの仕事ややりがいのある人生を大切にしたい、あげようとしてあがるものかわからないから、他のことに努力していきたい、サバサバしていて男っぽい性格や外見であっても大切なのは中身であるから、あげようとして上がるモノなのか？、あげたほうがいいが自分には無理だと思うから、自分磨きになるかもしれないがあまり無理はしてほしくない、できることが増えるのはいいが「女子力」にこだわる必要はない、無理にあげなくてもよいと思う(2)、「女子力」をあげることもより大事なこともある(2)、意識して上がるものではなく内面からのものだから

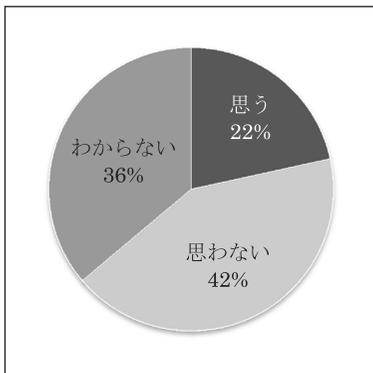
自分に関係がない72：自分には関係ない(2)、男だから(2)、その人の自由(47)、ただの美意識なので、綺麗になりたい人が綺麗になればいい、興味がない(20)

その他14：ゆるふわとかがあまり好きではないから、誰でもできるようになったほうがいいことが「女子力」の中身だと思う、「女子力」をあげるというのは単なる言い訳で好き勝手にやっているだけ気にすることではない(2)、あくまで「女子力」は客観的な観点、悪いことではない、その人にとってプラスの能力になると思う、正直その努力がはっきりわからないことが多いから、馬鹿にされているように見受けられる、その人の個性が大事だと思うから、特に気にならない、やりたい人は勝手にやればいいと思うが自分には求めないでほしいし人間性をはかる尺度にはしてほしくない、女子力で判断しないでほしい、個性だから

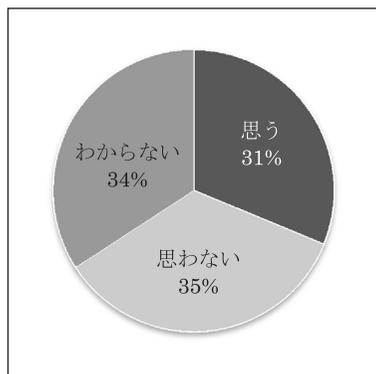
「未婚／既婚者それぞれに対し、求められる『女子力』は違うと思いますか」と聞いたところ、表10のように「思う」より「思わない」が多かった。

表10

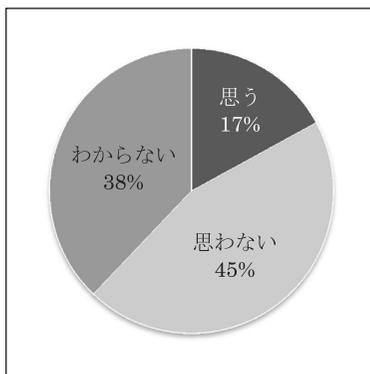
全体



女性



男性



「思う」と答えた者に、未婚と既婚でどのような違いがあると思うか聞いたところ、下記のような自由回答が寄せられた（抜粋）。

外見的なこと25：外見(10)、おしゃれ、かわいらしさ(3)、異性に愛されるための力、人を引き寄せる魅力、女性社会の中で重視、人間関係、男性に対して、自分自身の問題(6)

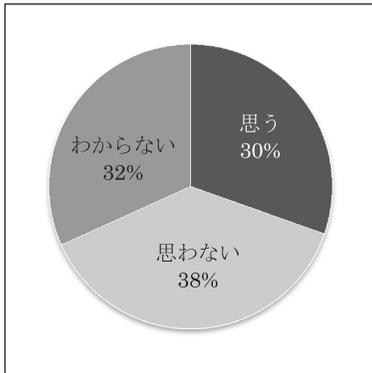
内面的なこと55：内面(10)、生活のスキル(2)、家事(11)、育児(4)、ママ付き合い、家庭的であること(3)、主婦としてのスキル(2)、母親としての力家族に対するふるまい、妻や母として家族を支えていく力、異性に尽くすための力、家を持つ「女子力」、「女性」より「人間」としての力、大人っぽい、落ち着いている、夫や夫の周りの人に対して、パートナーに対する問題(2)、恋愛と結婚で求められるものが違うと思う男をとらえる手段かどうか(5)、家庭的かそうでないか(2)、結婚しているかいないかで意識が違う深度が違う、社会的経験（特に仕事上の）、時間の少ない中でどう自分を磨いていくか、ずっと一緒にいたいと思わせる力、異性への態度

既婚者に「女子力」は求められない8：そもそも既婚女性に「女子力」は求められない(2)、求められるのは「家庭力」とか「結婚力」だと思う、主に未婚者に使われる(5)

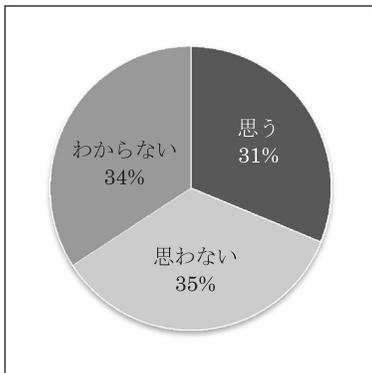
「年齢によって、必要とされる『女子力』は違うと思いますか」と聞いたところ、表11のように「思わない」がやや上回った。

表11

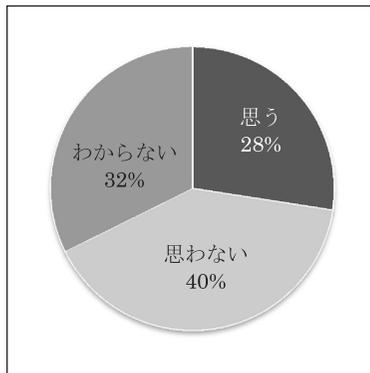
全体



女性



男性



さらに「思う」と答えた者に年齢によってどのような違いがあるか聞いたところ、下記のような自由回答が寄せられた（抜粋）。

若い人：見た目、お菓子作りやお化粧、ファッション等

若くない人：配慮がある、女性・婦人らしさ(2)、周りへの思いやり、人間としての魅力、内面、家事、面倒見の良さ、母親としての力、気配り

年齢を重ねると必要なものが増える26：年齢層が高いほど家事など実践的なものが必要になる(4)、年をとると外面だけでなく中身も伴わなければいけない(11)、年をとるにつれてさらに気を使えるようになったほうがいい、気配り見た目のかわいさから家事ができるかに変化、若者は容姿のみ20代から上は容姿と作法、マナー、年をとればよりハードルが上がっていく（料理はできて当たり前など）(2)、他人にできる気遣いレベル、年齢を重ねたうえでのみ力が必要になってくる、大人はマナー教養が特に必要、10代・20代は若さで乗り切れるけど30代を過ぎると教養が必要、無理に若づくりとかせずとその年齢に合ったファッションや化粧・マナーなどが身に付

いているかどうか必要とされる

周囲の環境に合わせる60：年齢によって社会が求めるものが違う（年相応）(39)、周囲の環境(5)、社会的経験(4)、外見・話し方は年齢によりかえる必要あり、20代は結婚・仕事30代は育児などそれぞれのライフワークがある、10代の若者とおばさんとおばあさんでは見た目も全然違うし考え方もちがう、男性から求められるものが違うと思う、年齢によって恋愛の仕方がちがうから、結婚力との関係、三十路は必死、若い時は結婚のためそれ以降は家事のため、若づくりとおしゃれの違い、TPOに応じての対応内容（仕事・家事・学校など）、視点の捉え方から違う、接する人間（の世代）が違うので

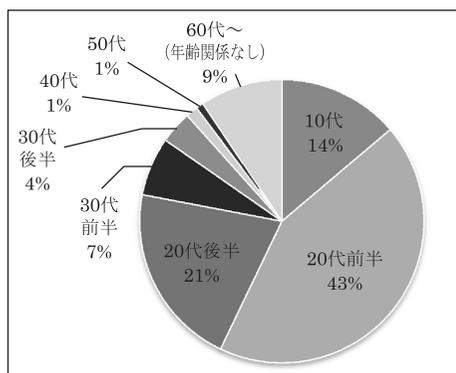
「女子」を適用すべきではない12：一定以上の年齢になると女子と言えない(10)、年齢が高い人が「女子力」と言っているのは若作りしているみたいでイタイ、40過ぎのBBAが「大人思春期」とか言って「カワイイ」ファッションしてるのは見ていて痛々しい

その他15：年齢が上がるとともに「女子力」のために使う金額が跳ね上がる、子供はかわいい大人はきれいというイメージ、年を取ると落ち着きや上品さが必要(8)、年齢が上がるにつれ常識になる、必要とさせる「女子力」は変わらないと思うが年齢が高くて「女子力」が高いと若づくりと思われることもあると思う、学生は見た目への気配りや社会のマナーが問われるが社会人は見た目より振舞い方などが問われる、服装の違い、容姿

「あなたは、何歳の女性まで『女子』という言葉を使用できると思いますか」と聞いたところ、表12のように「20代前半」「20代後半」と答えた者がほとんどだった。前掲の「年齢によって、必要とされる『女子力』は違うと思うか」という設問への回答結果と併せて考えると、「女子力」とは多くの者にとって一定の具体的な内容をもっており、「若さ」と必然的に結びつけてイメージされているといえる。

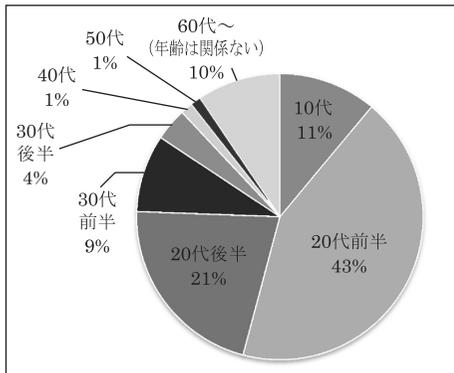
表12

全体

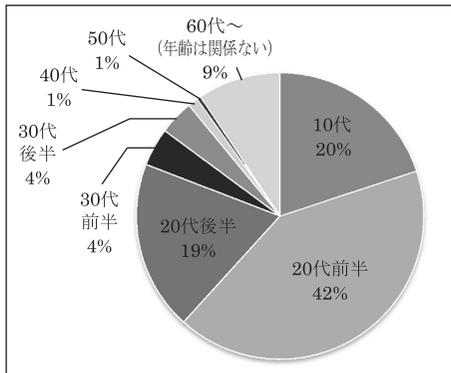


「女子力」とポストフェミニズム（菊地）

女性



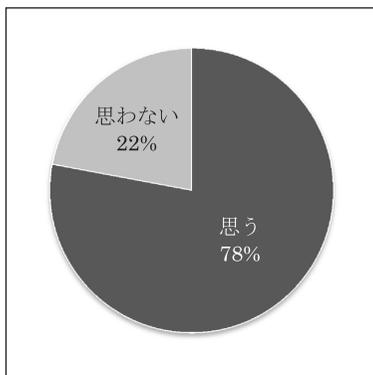
男性



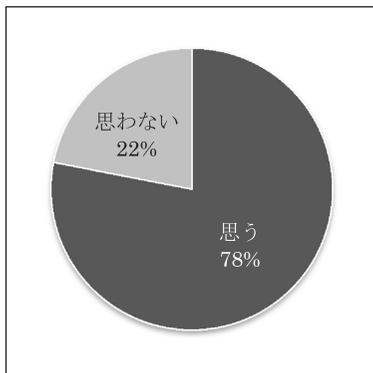
「あなたは、女性の社会進出は進んでいると思いますか」と聞いたが、これは女性の社会的地位に関してどのように捉えられているかを探った設問である。結果は表13のように進んでいると「思う」者が78%と多かった。

表13

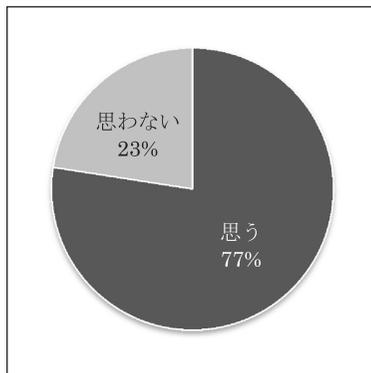
全体



女性



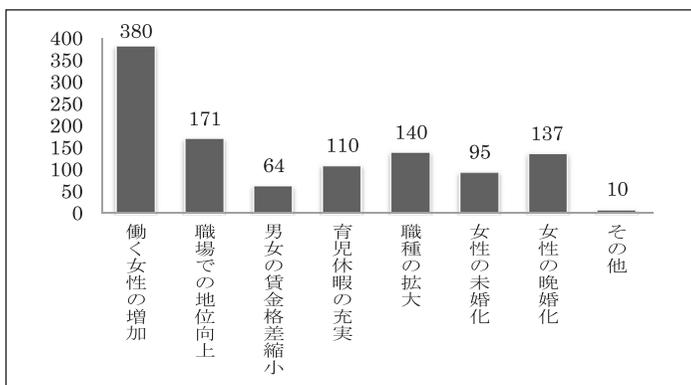
男性



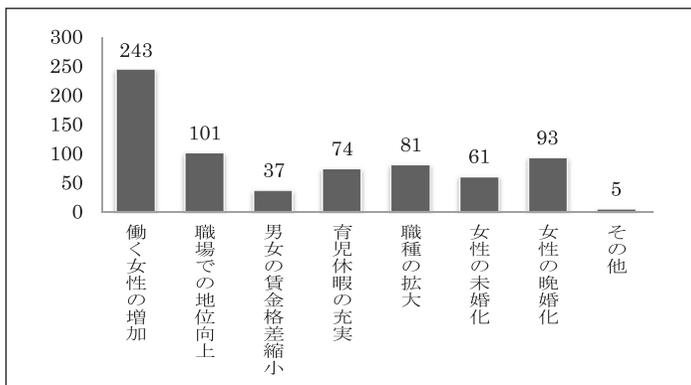
「思う」と答えた者に「それはどのような点ですか。あてはまると思うものすべてに○をつけてください」と聞いたところ、表14のような結果となった。「働く女性の増加」を挙げている者が多いが、その「働きたか」の内容にまでは踏み込んでいない。

表14

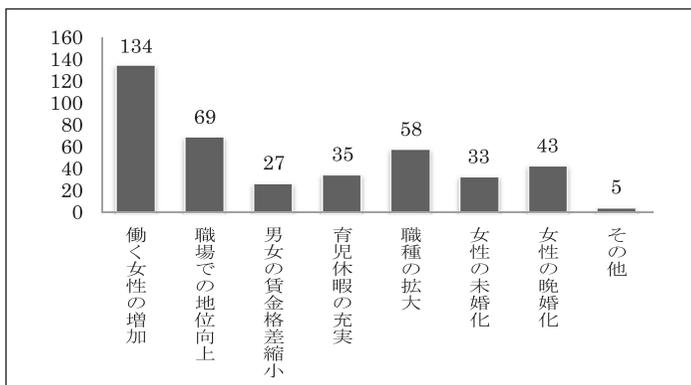
全体



女性

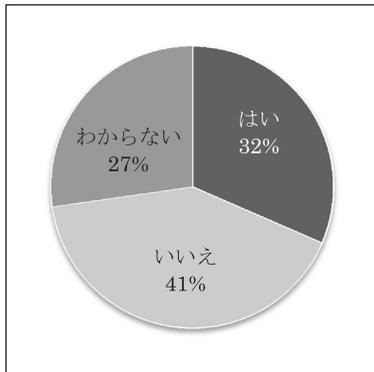


男性



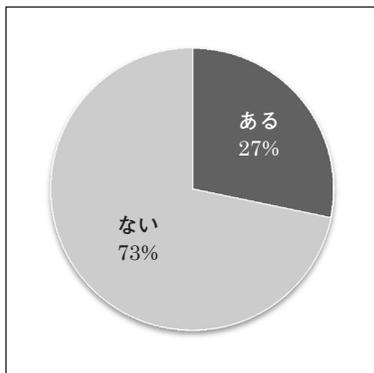
女性に対して「あなたは、女性らしくあるために、周囲から『女子力』を高めることを求められていると感じますか」と聞いたところ、表15のような結果となった。「いいえ」が多いものの、32%が「はい」と答えている。

表15



女性に対して「あなたは、『女子力』をあげるためにしていることはありますか」と聞いたところ、表16のように「ない」が73%と多かった。

表16



「ある」と答えた者に、具体的に何をしているか聞いたところ、下記のような自由回答が寄せられた（抜粋）。

外見94：メイクに気を使う(30)、ファッションに気を使う(26)、身だしなみに気を使う(9)、髪型に気を使う(4)、無駄毛処理(4)、ダイエットをする(11)、ジムに通う、肌に気を使う(6)、エステに行く(2)、眉毛の形にこだわっている

持ち物3：かわいいものを持つ(3)

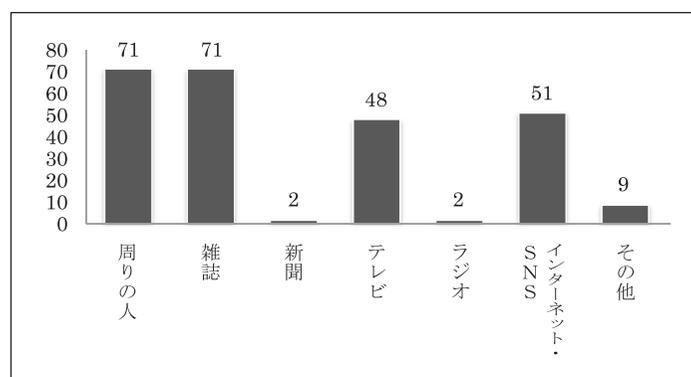
教養・マナー9：読書、四季を知る、勉強、もうひとつ言語を勉強する、政治・経済・文化等の興味関心を抱く、すわり方(2)、マナー(2)

家事26：片づけ(2)、料理(14)、家事・家事手伝い(6)、料理教室(2)、お菓子作り(2)

行動34：静かにする、怒らない、言葉づかい(7)、よく笑う、謙遜、出しゃばらないように、気配り(3)、人間関係に関心を払っている、行動(2)、早起き、お湯に浸かる、雑誌を読む(6)、流行のチェック、清潔感、異性の前だけでなく、いつでも身だしなみや言葉遣いをきちんとするように心がけている、自律した行動を意識している、自分のことは自分でこなす、男性の前では「女性らしく」ふるまうようにしている、「女子力」ゼロではなくマイナスと言われないように、おっさんぽい行動は控えている、物事をていねいに行う

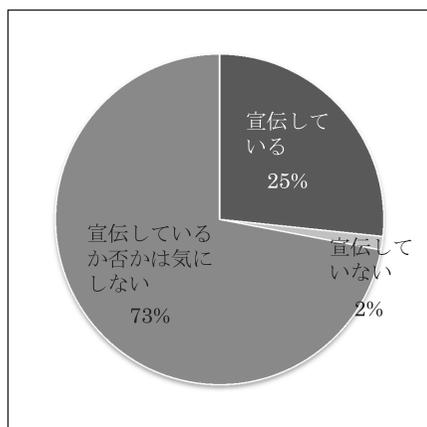
関連して、女性に対して「そのために、参考にしているもの・人・媒体はなんですか（あてはまるものすべてに○）」と聞いたところ表17のように「周りの人」「雑誌」「インターネット・SNS」「テレビ」が並び、多様な情報源から摂取していることが分かった。

表17



「同じ価格で『女子力』アップを宣伝している商品とそうでない商品があった場合、あなたはどちらを購入したいと思いますか」と聞いたところ、表18のように「気にしない」と答えた者が多かったものの、25%が「宣伝している」方を購入すると答えたのは注目される。

表18



5 アンケートから見る「女子力」に関する考察

5.1 「女子力」使用の実態

アンケート調査からは、「女子力」は意味が多岐にわたり、文脈によって様々に使われていることが分かる。また、女子力という言葉を使用することに対しては反対も多いが、「冗談の延長」と見なされがちなため正面から批判もしにくい、あるいは分析や批判の対象とはならないものと認識されている様子が見てとれる。

だが、改めて使用の実態をみると、「女子力」はその文脈性や多義性ととも、固定的なジェンダー規範によって構成されている。全体の約8割が内面に「女子力」を見いだしているが、その内面性の内容は自由回答で見られるように日常的な身体のあるあり方、コミュニケーションのあり方を問題にしている。料理や家事から始まり、持ち物や性格、コミュニケーションのスタイルと身体性の細部にまで至る視線が張り巡らされている。例えば「部屋が汚い」「休日に家でダラダラ」していると「女子力」が低いことになるなど、ひとりであるときにも管理される身体性が浮かび上がる。

一方で、「女子力」の主要な内容は家事能力および服装やメイクなどの外見の美、マナーなどと認識されている。「内面」に重きが置かれていることと矛盾するようだが、これは、「女子力」とは家事や外見の向上のために努力することにあると認識されていると考えれば矛盾しない。つまり、女子力とは必ずしも結果を得られなくても、努力すること自体に価値があるものなのである。例えば女子力の高さと「生まれながらの美人、美貌」はイコールではない。美や家事能力を目指して日常的に自発的に管理されようとする心身のありかた、内面性が「女子力」なのだ。

これは、あらゆる社会構成員に、トップを目指して競争に邁進することを要請するネオリベリズムの思想を体現した語彙だといえないだろうか。そういう意味で「女子力」はポスト近代型

能力の代表例だと見なせる。

ところで、29%の男性が「女子力が高い／低い」といわれたことがあると回答しているように、「女子力」は男性に対して用いられることもある。これは、従来の「女らしさ」や「男らしさ」という言葉が対象の性別と逆に言及される場合、肯定的な意味をもちにくいことと比較して考えれば、興味深い点である。「女らしさ」「男らしさ」は自然にもたれる生物的なものと認識されていたのに対して、「女子力」という言葉は人工的に努力して後天的に身につけられるものと認識されているためであり、これも上記のように「女子力」が競争のためのひとつの武器のように感受されていることを示している。

また、「女子力」は向上させることによって「恋愛」や「男性との関係」「結婚」などで有利になると考えられており、基本的にヘテロセクシュアルな「男性」中心的価値観の中にある。ただし英米のポストフェミニズム言説でみられるようなセクシーであることや性的に積極的であることといった性的含意よりも「家事」という無償労働的側面が大きい。

自由記述で「女性が頑張るのはよいこと」といったものがあつたように、女子力という言葉における女性性への肯定と秩序意識も見てとれる。「女子力」は「女性が輝く」等女性を肯定、鼓舞するメッセージでもあるため、フェミニズム的な価値観と混同されやすい。だが、回答からは主観的認識としてはフェミニズムについての記述は明示的にはほとんど見られず、フェミニズムというものの存在は大きくは意識されていないようである。

総じて、「女子力」の使用実態からは、ジェンダー規範と能力主義の結合が浮き彫りになる。「女子力」という言葉は、ポストフェミニズムの日本における存在を表現している

5.2 「女子力」とポスト・フェミニズム

ここでアンケート調査の結果を先行研究に照らして考察してみよう。

三浦は、ポストフェミニズム社会において「プリキユア的なグローバルなエリート女性労働者」が前面化されるのに対して、主婦的女性労働者は隠蔽され不可視化されると論じた。だが、日本社会の「女子力」言説においては、いまだに、主婦的女性のありかたが中心的に権威化、標準化されているという特色がある。つまり、主婦的女性のあり方はまだ不可視化されていない。それどころか新たな意味合いを帯びて再登場していると捉えることも可能だろう。あるいは、エリート層の女性労働者に体现されるグローバルな女性主体と、一般の専業主婦的女性労働者とを微妙につなぐものとして「女子力」を考えることもできる。ひとびとの孤立の進むネオリベラル社会における「絆」や秩序の回復として期待されているということもできるだろう。

米澤らの議論について考えると、「女子力」の使用実態からは「良妻賢母規範からの解放」という意味は見られず、むしろ「新たな良妻賢母規範」として「女子力」という流行語が使用されている可能性が高い。年齢との関係についても「女子力が年齢・世代を超える」という点は合致

せず、逆に若さと密接に関連づけて使用されている。

「良妻賢母規範」を家庭に止まらず職場を始めとする公的領域において主体的に戦略的に発揮しようとする新しい「女性性」が編み出されている。これを、新しいジェンダー・セクシュアリティ秩序の再編の一端と考えることができる。

6 最後に

本論では、「女子力」の使用実態を通して、日本におけるポストフェミニズムの展開について探った。「女子力」が、能力主義的・主体的な新しい要素と、古典的なヘテロセクシュアルな要素の両面を持つジェンダー規範であることを論じた。

日本社会においてもポストフェミニズム論の視点は有益な示唆を与えてくれるだろう。階級とナショナリズムやレイシズムが入り組んで展開するネオリベラリズムの中で、ジェンダーはどのような位置づけられるのか今後も検討が必要である。

また、ポストフェミニズム論において、オルタナティブなありかたとして議論される第3波フェミニズムについて付言しておきたい。フェミニズムへの社会的な承認が薄い日本社会で、第3波フェミニズムの可能性はあるのだろうか。「女子力」がなぜ言及され、肯定されるのかについて考察すると同時に、支配的な意味での「女子力」的ではないジェンダー・セクシュアリティに関するオルタナティブの共同できる価値を提示していく必要も感じられるが次稿の課題としたい。

[文献]

馬場伸彦・池田太臣編, 2012, 『「女子」の時代!』青弓社.

Budgeon, Shelley, 2011, "The Contradictions of Successful Femininity", Rosalind Gill, Christina Sharff eds., *New Femininities*, Palgrave.

Duggan, Lisa, 2003, *The Twilight of Equality?*, Beacon Press.

Faludi, Susan, 1991, *Backlash*, Crown. (=1994, 伊藤由紀子・加藤真樹子訳『バックラッシュ』新潮社.)

Fraser, Nancy, 2009, "Feminism, Capitalism and the Cunning of History", *New Left Review* 2:56 March/April. (=2011, 関口すみ子訳「フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ」『法学志林』第109巻第1号.)

Gill, Rosalind, 2007, "Postfeminist media culture", *European Journal of Cultural Studies* 10(2).

Harvey, David, 2005, *A Brief History of Neoliberalism*, Oxford University Press. (=2007, 渡辺治監訳『新自由主義』作品社)

本田由紀, 2005, 『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版.

河野真太郎, 2015, 「学習社会とポストフェミニズム——『リタの教育』における終わりなき成長」河野・越智博美編 (2015).

河野真太郎・越智博美編, 2015, 『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」 格差、文化、イスラーム』彩流社.

菊地夏野, 2013, 「大阪・脱原発女子デモからみる日本社会の(ポスト)フェミニズム——ストリートとアンダーグラウンドの政治」ひろしま女性学研究所編『言葉が生まれる、言葉を生む』ひろしま女性学研究所.

——, 2015, 「ポストフェミニズムと日本社会」河野・越智編.

McRobbie, Angela, 2009, *The aftermath of feminism*, SAGE.

三浦玲一, 2013, 「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性」三浦・早坂編 (2013).

三浦玲一・早坂静編, 2013, 『ジェンダーと「自由」』彩流社.

名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科調査実習菊地班, 2014, 『2013年度調査実習報告書第2分冊 社会現象としての「女子力」』名古屋市立大学.

Rosenfelt, Deborah and Stacey, Judith, 1987, “Review Essay: Second Thoughts on the Second Wave”, *Feminist Studies* 13, no. 2(Summer).

竹村和子編, 2003, 『“ポスト”フェミニズム』作品社.

田中東子, 2012, 『メディア文化とジェンダーの政治学』世界思想社.

米澤泉, 『「女子」の誕生』勁草書房.